発行日　昭和４８年１１月２日　（金）

中央大学　理工学部
電気工学科同窓会々誌

第１１号
発行所　東京都文京区春日１－１３－２７　中央大学理工学部同窓会
TEL（８１３）４１７１（内）５１１～５３４

はしがき

会長　大類　浩

名会長だった吉久教授の后を受けて、会長にさせられましてからもう三年になりました。最近は例の学園紛争も大分静かになりまして、やっと学園らしくなりました。電気工学科として、真に痛恨にたえない事は谷忠篤元教授と中井達人教授が御他界された事です。谷先生は在職期間は不幸短かかったのでしたが、我々にとって特に印象深い先生で御座いました。中井先生は二十八年から兼任講師、続いて四十二年から専任教授として理研からこられて本学の研究と教育にその情熱を捧げてこられました。未だお若い年令なのにほんとに残念です。ここに謹んで両先生の御冥福を御祈り申し上げる次第です。

さて、電気工学科も新鋭の高橋講師が東大から見えられたり、諸先生の御努力によって大学らしい大学に発展しつつあります。最近卒業生の篠田、木下の両講師がアメリカでの学会発表等にされました。私、個人の考えではありますが、電気工学科の研究は在来のテーマのみならず長いレンヂでみて将来中心課題になるようなテーマをどしどしやって頂いて少くとも理工学部としてユニークな存在となって皆さんが卒業した事を誇りに思うような大学になる事を熱望している次第です。次に御報告申し上げたいことは中大の将来の発展の為、駿河台より都の西部抽木村に移転する予定があります。法・経・商・文の諸学部が七万余坪の校地に移り、理工学部は現在地に七千余坪の増築を行う予定です。この計画の遂行と並行して電気工学科の研究、教育も一層の改善と発展をもくろんで居ります。

次に、同窓会についての私の希望ですが創立以来二十年にもなりましたのでそろそろ卒業生が中心となって会長等も卒業生がなられるようにしてゆかれたらどうでせうか。

また、卒業生が二千名以上になり、各事業場にも相当進中しておられる処が多い様になりましたので、後進の卒業生の為とも各事業場で支部に類するような組織をつくるのはどうでせうか？。このようなことが出来れば本部と皆さんとの連絡もこれまでよりはよくなって何かと便利な点が多いと思われます。

次に目下の事業として、在本部の卒業生の諸先生の御努力で名簿とか会誌が充実して参りました。特に今年は市川、有馬先生の御努力で名簿に皆様の会社から広告代等を寄附頂き在来のものより立派なものを出す事が出来ました。今后は二年に一度位に訂正版を出してゆきたいものです。また会誌等もパンフレット形式から雑誌形式のものに順次発展させてゆくのは如何でせうか。皆様の御意見も充分承り度いものです。

さらに在校生と卒業生の連絡関係も大事な事なので、これに関して一つの事業（？）としてカップと楯を同窓会から寄附して頂き学年対抗野球会の賞として出して頂きました。将来は総会等にも四年生の学生等も出席してもらう事等も幹部の間でよりより相談しております。

総会の開催については、各事業場のグループに御協力を頂いたらという事が幹部会で議題となり、差当り今年は八州電機の皆様、特に黒崎、望月両先輩に御世話になりました。今后は各グループ回り持ちでお願いしたらと考えております。

同窓会は、我々みんなのものでありますので、種々の仕事も卒業生が多くなるにつれて事務的にも種々手数が多くなると存じますが皆様の御協力により、よりよい会にしたいと心から希望しております。

第十八回総会の開催に当って

才二期　小林　健一

晴天下、秋たけなわの季節となりましたが、会員諸兄には益々御発展のことと思います。

さて別紙にて既に御存知のことと思いますが、来る十一月十七日（土）に本会の総会が開催されることになりました。会員諸兄と共に盛会を願って止まない次第です。

ところで前回の才十七回総会が開かれましたのは昭和四十五年十一月二十九日でありまして今回はまさに三年ぶりということになります。御存知のように総会は年一回開かれることに会規則で定まっておりますが、このように長期間開かれなかったことにつき疑義を持たれる方が多いかと思いますので、その辺の事情と今回の総会の新規性について少々の説明をさせて戴きたいと思います。

まずこのような特殊の状況になった原因の主なるものは、どうも弁明じみますが、大学内の紛争が長期に亘って続いたということでして、近くは本年正月から三月にかけての学年試験全面中止（リポートへ切換え）並びに学内立入禁止（教員も殆んど入れなかった）等があります。本来言語・行動に全く自由であるべき大学にあってこのような措置をとらざるを得なかったということは当事者以外の方々には想像が出来難いかとも思われますが新聞誌上に報道された各種関連記事等も斟酌されて会員諸兄の御理解を戴きたいと思っている次第です。又もう一つの間接的な理由は会員諸兄特に若い卒業生中の一部の方々の同窓会というものに対する認識とか受取り方に問題があるかと思われます。同窓会なるものの存在意義を今更ここで説明する迄もないと思いますが現状では卒業時に入会を拒否する人が多く、毎年学内幹事をして嘆かせているような次才ですし、毎年卒業生が増えているにも拘らず（昭和四十八年三月現在約三千四百名）総会そのものについても出席者が漸減しているようなわけで学内では同窓会の廃止又は凍結すら考えた時期がありました。勿論本会の運営に主としてたずさわるを得ない学内幹事としては種々反省をしてないわけではありません。いわく、先生方の出席が悪いとか会そのものに新規性が無い、魅力に乏しい等々・・・学内幹事の不徳の至すところと言えるかも知れません。然も学内・学外幹事に殆んど新陳代謝が無い上に、はたから「好きな奴」だけが勝手なことをやっているようにとられる向きもあって幹事達の意気も消沈しようというものでした。このような本会存続の危機にあって大変心配

された会長大類先生並びに先程亡くなられた中井先生等が強くバックアップされもう一度新規なる努力をしようということになりました。その具体的な動きとして昨年十二月一日に幹事会を開いたわけですが在来の学年別幹事に加えて卒業生の多く就職している会社等を重点的にピックアップしたグループ幹事を作って会の運営にまとまった援助を戴くことになりました。この日は突然でしたので八州電機グループに色々と世話をして貰いましたが他にも電々公社、東芝、沖電気、サンヨー等が方々にも出席して戴いたわけで、グループ幹事の承認と内外幹事の交替をも含んで新風を吹き込むことをねらったわけです。ところがこの新しい路線の出発早々に先述の学内問題と五月には長い間貢献のあった中井教授の急逝等が重なり、今日に至ってしまいました。然し乍ら去る十月十二日再度幹事会が開かれ冒頭に述べたように十一月十七日総会開催を決定し且つ、新方式の才一回目でもあり色々と不明の点も多いこと故面倒乍らもう一度八州電機に総会運営の骨折りを願うことにして話が進んで来たわけです。会員諸兄にも種々御意見、御批判があることと思いますが、是非共前向きの御協力を戴き、本会の発展を推進して戴きたいと思っております。

さて、以上のような経過を経て取り行なわれる今回の才十八回総会は八州電機の黒崎氏をチーフとするグループの意向を強く取り入れ、会の内容も非常に充実したものとなる予定ですので会員諸兄には御期待の上多数御出席下さることをお待ち致しております。

終りに本総会と時を同じくして本会々員名簿がスタイルを一新して完成致しました。別掲の説明にもありますように版が大きくなっただけでなく印刷、用紙も格段と素晴しくなり、又会社の広告等も取り入れてより見応えのあるものとなりました。担当の学内市川幹事を始めとするスタッフ各位の労に感謝すると共に会員諸兄の間にあって十分の役に立つことを期待しております。

昭和四十八年十月二十三日

所感

主任教授　吉久信幸

本年四月より電気工学科主任教授の仕事をしていますので、学校の近況報告をすべきですが、それについては会長大類教授より記事がありますので、この頃考えていることを記述します。

今年の四月からは理工学部校舎では学生運動がなく、休講もなくて平静に授業を続けています。四年生の就職状況も非常に良く、これは卒業生各位が真面目に仕事をされているおかげで、中央大学の名声が上ったためと感謝しています。

この頃考えていることは、心と病気との関係です。よくストレスが胃に悪いと言われますが、心を平静に保つことが健康に大切であり、胃病に限らず、多くの病気の原因が、心のひずみであるし、また病気を治療する上でも、心のひずみを取り去ることが賢明です。（私の経験で右の甲状腺がはれて、医者からは入院して手術するように言われたのですが、心の持ち方で、手術することなく、はれがなくなりました。）どうも電気工学科の仕事をしていると、人事に関係することまでも、厳密に処置したいという気がしますが、心の平静を保つためには、寛大になることが必要です。誰れでも人間は個性と欠点とを持っています。相手の欠点を責めることは、自らの心を乱すことになります。無心ということの著者鈴木大拙翁が九十八才の長寿を保たれたことを思うと、人間お互に相手を尊重し、気持よく共存共栄するよう、大きな心、寛大な心を持って暮したい。小さいこと、他人の欠点にとらわれずに、平穏な心で暮したいというのが、昭和四十八年になってからの私の心境です。

どうぞ皆さん健康を大切にして、良い生活をして下さい。

同窓会に想う

才一回生　吉江実成彦

学内外の多数の同窓生の協力を戴き、こゝに十八回目の同窓会が開かれる運びになった事を心から喜ぶ次才です。早いもので、電気工学科からは二十一回目の卒業生が育ち、同窓生諸氏も数多くの方面に浸透し、大いに活躍されており、本同窓会も意気軒昂たる処を示しています。

残念なことには、昨年と一昨年の同窓会は、学内紛争のために開催することが出来ませんでした。これは、今まで、同窓会開催の準備の大半を学問の同窓生の尽力に依存していたことに起因したのです。そこで、今回は学内の他に、殊に学外の同窓生諸氏のご尽力と協力を仰ぎ、やっと開催の運びに漕ぎ着けたのであります。

同窓会の年令の浅い以前から、同窓会には積極的に参加して戴くよう呼び掛けて参りました。現在のように、同窓会の年令層が厚くなればなる程縦の支流の機会が必要になります。その一環として、本同窓会を大いに利用してください。不本意にも出席出来ない諸氏には、近況などを本同窓会に連絡戴ければ幸甚です。同窓生諸氏の力で同窓会をより盛り立てゝ行こうではありませんか。

帝国大学を御卒業の后、電気試験所、京城帝国大学教授、武蔵工業大学教授、立命館大学教授を歴任され、昭和三十一年四月に本学に教授として就任されましたが　以来良く後輩教授・大学院生・学部学生の指導に当たられ多くの貢献をされたわけであります。昭和三十七年病にたおれられてよりずっと闘病生活をされておられましたが、前述のような訃報に接したのであります。同窓生一同哀悼の意を捧げ、谷先生の御冥福を祈りたいと思います。

名簿発行にあたって

市川友之

名簿は、四年毎（オリンピック開催の年）に発行することとなっておりましたが、学内事情のため今年に持越し、ここに新版（七五年版）発行のはこびとなりました。

学内の同窓生諸君の協力と、広告をいただきました十九社の皆さまのお陰をもちまして、りっぱな名簿ができ上りましたが、内容はすでに訂正しなければならない状態であります。それにはなんと申しましても、同窓生各位が移動変更のありましたときには、速やかにその旨ご連絡いただき、ほんとうの意味での積極的なご協力が必要なのであります。できれば二年毎（次回は七五年）に発行したいと考えますので、いまからご協力を賜りたくお願い申し上げます。

なお価格は、実際には一部約千円ですが、学内直接発売七〇〇円、郵送の場合は送料共八〇〇円と幹事会で決めていただきましたので、ぜひご購入いただきたくお願い申し上げます。

結婚

○城戸満
○大悟法安路
○小林幸一
○実森彰郎
○渡辺昌俊
○西村幹夫

赤ちゃん誕生

○佐藤信夫
○松下達雄
○斉藤栄喜
○木下源一郎
○志村公夫
○城戸満
○篠田庄司

死去

○谷忠篤
○中井達人

新任紹介

○高橋雄造

「趣味の釣」

才二期　望月政尚

最近のレジャーブームに乗ってレジャー人口は年々増加する一方である。中でも釣・ゴルフはその代表的な存在といえる。

私も、ご多分にもれず本格的に釣を始めて五年位になるが、釣は朝早目か夕方に魚の食いがよいとされている。面白いことに、釣に行く人、ゴルフに行く人が朝一番電車に同居して乗っている。乗客のほとんどがこの両者で、一般の乗客はちらほらする程で、さすがに釣人口・ゴルフ人口が多いんだなと思わされる。ご経験のある方もおられると思いますが、なるほどと思われることでしょう。

さて、私はよく人から釣とゴルフではどちらが面白いかときかれることがある。そういう時はきまって釣の方がだん全面白いよと答えることにしている。私もかってゴルフ場へ上手でもないのにフルセットをかついで数十回通ったこともある。広々たる原野を白いボールを追って（林の中を、或いは谷底の雑木の奥までどこまでも・・・。）歩くのは健康的にもよし、気分もそう快になるし正にレジャーの代表的といえる。

私が釣の方が面白いよというのは、実は食け惜しみのようなもので、休日というと釣に出かけてしまいゴルフをやる暇もなければ経済的余裕もないのである。ゴルフは止っているボールを打つだけでだれでも出来るが、釣は相手が見えないし、つねに動いているもので、それだけむずかしいものだと云ってお茶をにごしている。私は伊豆大島へ釣に出かけることが多いが、休みに家の中でごろ寝より、新鮮な空気を腹一ぱい吸いこんでコバルトブルーの空にエメラルドグリーンの海を前にして小鳥のさえずりをききながら釣を楽しむ時は、公害も騒音も忘れ魚との対決を期待している時こそ寿命が延びる思いがする。やはり釣りは釣り人にだけしか判らない良さがあるものである。もっとも中には釣りはレジャースポーツではなく魚をとることだと、どんな小さな魚でもとってしまう釣り人もいる。私も仲間と相談して幼魚は海に返してやることにしている。大きい魚は人間に食べられるのが本望であるなどと勝手な理屈をつけて食べてしまうが。

釣は健康的であり格好のレジャースポーツであると思う。或る古老（念のため七十五才）が面白いことを云って人を笑わせていた。釣りに月四回行くとして、年に五十回、十年間には五百日で一年半以上も人よりよい空気を吸い、よい環境にいることになる。同じ年の人より少くても一年半以上長生きすることが出来るのだと、うまいことをいっていた。

健康を保つには、心を健全に、体を動かし、良い環境で過すこと、いわば釣は健康の泉である。

追悼のことば

遠藤正雄

会員の皆様にはすでに新聞紙上等で御存じの通り、中井教授には今年五月一日築地のガンセンターで肝臓腫ようのため他界されました。皆様と共に深く哀悼の意を表すると共に、故人の御冥福をお祈り申し上げたいと存じます。

先生は昭和十七年東京帝国大学を卒業され、ただちに理化学研究所に入所され「炭素の接触抵抗」を始めとする電気材料に関する諸研究に従事して来られました。また本学に対しては中央大学工学部創立当初より兼任講師として電気材料の講義を御担当され、一方、卒業研究の御指導などにも積極的な熱意をもって当ってこられました。続いて昭和四十二年には、中央大学の教授になられ、教育に、研究に多大の業績を残されました。また先生が教授になられて間もなく、大学紛争が始まり、先生には大学紛争が激しかった時代を通じて、常に教職員の先頭に立たれ真剣に学生と応対しておられた姿は、今だに忘れえぬところであり、また昭和四十五年には学生部委員として、日夜学生問題に御尽力戴いたことなど功績は偉大なるものがありました。我々、先生の恩顧を受けた同窓生としては、追慕と讃歎の念を新たにするものであり、その先生とも今はこの世でお会いできないことは、痛惜のきわみであります。

ここに謹んで同窓生の皆様に御報告申し上げる次才です。

故中井達人氏遺児教育基金募集の件

別項のように中井教授が御他界の際には、電気工学科の諸氏並びに卒業生の一部の方々の御尽力を賜わりましたが、今回新たに電気工学科を中心として、表記のような事業を取り行なっております。つきましては左記の要領で同窓生諸兄の御賛同をいただきたく、本誌を御借りして御願い申し上げる次才であります。

――発起人一同――

記

募集金額　一口一千円単位
御振込先　富士銀行池袋支店
口座番号　二三〇一五七一三三
故中井達人氏遺児教育基金
締　切　昭和四十八年十一月三十日

訃報

大分時間が経ってしまいまして恐縮で御座居ますが、去る昭和四十七年二月八日に本会名誉会員・元中大教授谷忠篤先生が亡くなられました。谷先生には京都

会務報告

第十七回総会が昭和四十五年十一月二十九日に開かれました。はとバスで都内見学のあと芝の留園で総会と懇親会を行いました。会長以下五十三名と少ない参加者でありましたが、楽しいひとときを過しました。

第十八回幹事会が昭和四十七年十二月一日五時より八州電機株式会社で開かれました。出席者は大類会長以下二十一名で、議題は学外幹事について検討しました。

第十九回幹事会は昭和四十八年十月十二日六時より中央大学で行いました。出席者は会長以下十四名でした。議題は第十八回総会の件、その他会則変更、役員幹事改選、会誌、名簿等についての内容でした。

以上

簿外財産

整理用戸棚（スチール製）	1
優賞トロフィ	1
準優賞盾	1
前回作成名簿の在庫	なし

昭和47年度会計報告

収入の部		
前年度よりの繰越金		1,200,159
47年度 総会費		0
預金利息		26,610
名簿代		330
47年度終身会費		207,000
計		1,434,099
支出の部		
47年度 総会費		0
通信及び印刷費		0
アルバイト代		0
事務・運営費		34,350
名簿関係（準備費）	印刷費（1973年版）	10,000
	通信費（1973年版）	44,000
	事務費（1973年版）	8,232
準備費		71,920
次年度繰越金		1,265,597
計		1,434,099

昭和46年度会計報告

収入の部	
前年度よりの繰越金	957,334
46年度 総会費	0
預金利息	34,510
名簿代	5,070
46年度終身会費	215,000
計	1,211,914
支出の部	
46年度 総会費	0
通信及び印刷費	0
アルバイト代	0
事務・運営費	1,620
名簿関係 印刷費	0
通信費	7,805
事務費	2,330
次年度繰越金	1,200,159
計	1,211,914

昭和45年度会計報告

収入の部	
前年度よりの繰越金	940,912
45年度 総会費	97,200
預金利息	40,730
名簿代	760
45年度終身会費	188,000
計	1,267,602
支出の部	
45年度 総会費	111,915
通信及び印刷費	97,050
アルバイト代	8,536
事務・運営費	28,267
名簿関係 印刷費	64,500
通信費	0
事務費	0
次年度繰越金	957,334
計	1267,602

上記，昭和45，46，47年度会計報告の収支計算は適正に表示しているものと認める。

昭和48年10月1日

弁理士　服部修一 ㊞

電気工学科　遠藤正雄 ㊞